

土器が語る古代のいちはら（資料抜粋）

はじめに（語るとは何か？書くとは何か？）

文字よりも言葉が先にある。

語り伝えられていた時代と、書留られている時代

言葉は、音律と情景をもって伝えられていく。

伝えられるに従って、変化し、整えられていく。動く言葉、固める記録。

変わってほしくないこと→記録化が進む。

不文律と成文法

『万葉集』巻1の20 額田王

・「茜さす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る」

『万葉集』巻1の21 大海人皇子（後の天武天皇）

・「紫の 匂へる妹を 憎くあらば 人妻ゆえに 我恋ひめやも」

※額田王：『日本書紀』には鏡王の娘。大海人皇子に嫁して十市皇女を産むとある。

持統天皇の吉野行幸に際して、弓削皇子と交わした贈答歌がある。

※『万葉集』：漢字のみで書かれている。（万葉仮名が使用されている）

※独自の文字文化を持たなかった。漢字→カタカナ→ひらがな ではない。

見分けるためのものなら、記号でもいい。

「×」「○」など

荒神谷遺跡（島根県）の銅鐸と銅剣に「×」

日本最古の文字史料

- ・三重県松阪市嬉野中川町 貝蔵遺跡 3世紀初頭の広口壺に墨書
- ・三重県松阪市嬉野町 片部遺跡 4世紀前半の埴型土器の墨書「田」
- ・熊本県玉名市 柳町遺跡 4世紀初頭の木製鎧棒状留具裏面文字「田」

※貝蔵遺跡出土広口壺：平成9年4月発見。

広口壺頸部に龍紋の墨書、直口壺体部に人面の墨書

※片部遺跡出土埴型土器：平成7年発見。

口縁部に「田」の墨書

※柳町遺跡出土木片 : 長さ 7.8cm、幅 1.1cm

短甲を構成する板の継ぎ目部分の留具。

約 5mm 程度の大きさの文字 5 文字の左端部が「田」他は、不明。

焼印の可能性もある。字画が一部欠けていることから異説あり。

文字の歴史

- 1 世紀 「貨銭（かせん）」（京都）舶載品
「漢委奴国王」金印（福岡）舶載品
- 2 世紀 「中平・・・」鉄剣（奈良）東大寺山古墳出土 舶載品
- 3 世紀初頭 貝蔵遺跡の墨書（三重）
- 239 年 「景初三年」銅鏡 舶載品
- 4 世紀初頭 「田」墨書（熊本）柳町遺跡
- 369 年 石上神宮（奈良）七支刀 舶載品
- 4 世紀前半 片部遺跡の墨書土器「田」（三重）
- 5 世紀中期 稻荷台 1 号墳出土鉄剣「王賜」銘（千葉）国産
- 471 年 稻荷山 1 号墳出土鉄剣「辛亥」銘（埼玉）国産 ワカタケル
- 622 年 法隆寺釈迦三尊像台座墨書
- 712 年 『古事記』成立
- 713 年 『風土記』編纂開始
- 759 年 『万葉集』成立

【やまとことばの世界】

わたしたちは、小学校に入学すると「さいた さいた さくらが さいた」などと、ひらがなから勉強します。ひらがなが、平安時代に漢字から生まれた表音文字であることは、すでにご承知のことと思います。

さて、2012 年 11 月に、京都で最古級のひらがな墨書土器が出土したというニュースが流れました。

平安時代前期の右大臣藤原良相（ふじわらのよしみ：三条院）邸宅跡の池から出土した 90 点ほどの食器の中に含まれていた 20 点ほどの墨書土器がそれです。土器の形からみると、9 世紀後半の文字史料だとわかります。

「・・・けの」からはじまって、右からの縦書きとなっているようです。新聞記事などを見ますと、途中に「かつらきへ」（葛城へ）「きなくひとにくしとおもはれえす」（来泣く人憎しと思はれ得ず）と読める部分のあることがわかりました。

この墨書土器については、京都大学の西山良平氏が、神楽歌の「朝倉」に「葛城へ渡る

久米路の継橋の心も知らずいざ帰りなむ」の一節を挙げて、三条院の邸宅で催された神楽の際に記された可能性がある」と指摘しています。詳しい事は、今後、発掘調査を担当した京都市埋蔵文化財研究所が研究をすすめてくれることでしょうか。期待したいと思います。

ところで、この「ひらがな墨書」から、何かお気づきのことはありませんか？

例えば、一行目の「・・・けの」の「の」です。「の」と書くところを、「乃」の草書体で表記しています。これは、『古事記』や『万葉集』がつくられた頃、「やまとことば」を書き表すのに漢字から借字して表音文字（万葉仮名）としたためです。ひらがなの「の」は、漢字の「乃」を借字して生まれました。万葉仮名では、基本的には楷書を用いていますが、9世紀以降になると草書体（＝草仮名）へ変化し、更に、ひらがなへと変化したと言われています。これまでの研究では、ひらがなの確立は10世紀に入ってからだと言われていましたから、今回のひらがな墨書土器の発見で、約半世紀遡ったこととなります。

土器の年代は、正しいでしょうか？この点では、ほとんど心配がありません。平成23年度の発掘調査で、「三条院釣殿高坏」と書かれた墨書土器が発見されていて、調査地点が三条院＝藤原良相邸宅跡であることが確定しているからです。藤原良相は、嵯峨天皇の親任が厚かった藤原冬嗣の子で、813年～867年とその生存年がはっきりとしています。ですから、9世紀後半の年代観は崩れることがないのです。つまり、9世紀の後半には、すでに、草仮名まじりのひらがな表記の行われていたことがわかったのです。

冬嗣の子で右大臣にまでなった良相（兄の良房は摂政）ならば、釣殿を持つような書院造の邸宅に住んで神楽の宴を催しても、何の不思議もありません。釣殿に酒肴を用意し、橋掛の向うで演じられる神楽「朝倉」に杯を傾け歌を詠む。そんな光景が浮かんできます。なんと雅なことでしょうか。

ほんのささやかな発想や気づきが、大きな発見につながるということがあります。

先ほどは、ひらがなの中に、草仮名の混じっていることをご紹介しましたが、他に何かお気づきのことはありませんか？



- ・ 皿の裏面に書かれている。
- ・ 草仮名やひらがなが、一文字ずつ書かれている。
- ・ 漢字が混ざっていない。（例：かつらきへ⇔葛城へ）
- ・ 書かれてまもなく、投棄されている。

e t c .

このあと、もう一つ、ひらがな墨書の史料をご紹介したいと思いますが、その前に、みなさ

んの発想のヒントになると思いますので、市原から発見された代表的な墨書土器を一点、ご紹介しておきたいと思います。

市原市山田橋の稲荷台遺跡から出土した土師器（素焼き）のお皿（直径 12.7cm）です。

内面と外面、両面にびっしりと墨書が書かれています。まず写真にある内面から説明しましょう。さまざまな方向から「月」の文字だけが書かれています。報告書では、九文字あるいは十文字としていますが、いかがでしょうか？

良相邸宅跡出土のひらがな墨書と比較してみてください。どんな違いがありますか？

さて、二つ目のひらがな墨書としてご紹介したいのが、三重県の斎宮跡第 171 次調査で発見されたひらがな墨書です。

土師器（素焼き）の皿の内側に「ぬるをわか」、外面に「つねなら」と書かれています。

もうおわかりだと思います。「いろは歌」の一部が書かれていたのです。平安時代の後期、11 世紀の終わりから 12 世紀の前半頃に使われた土器です。ひらがなで書かれた「いろは歌」としては、最古の史料として 2011 年に発見されました。大きな溝の上層からの出土でした。

そこで、この史料について、少し詳しく見ておきたいと思います。

はじめに、斎宮についてご紹介します。斎宮とは、「さいくう」とか「いつきのみや」と呼ばれ、「斎王」が住まわれたところです。現在の三重県明和町にありました。

「斎王」は、天皇に代わって伊勢神宮の天照大神に仕えます。『日本書紀』には、その前身とも思われる斎宮の記述が見えますが、確実なのは、天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願のお礼として伊勢神宮にご自分の皇女大来皇女を捧げたのが初代のようなようです。その後、制度的には南北朝時代のはじめまで続きますが、実態としては、平安時代の終わり頃で斎王の派遣は行われなくなっていったようです。

斎王は、天皇が変わるたびに、新たに立てられ、退位までその勤めを行いました。斎王に選ばれるのは、天皇の皇女など未婚の女性でした。天皇に代わって伊勢神宮に奉仕する斎王の住まう斎宮ですから、小規模ながらも条坊制地割が整えられ、中央からの高い教養を身につけた女官などが斎王の傍にはついていました。もちろん、現地で採用された人もいたでしょう。発掘調査を担当した斎宮歴史博物館では、そのような女官などが文字をならうのに書いた「いろは歌」の墨書土器だろうと説明しています。紙が貴重な時代ですから、習字には使い捨てられた土師器（素焼き）の皿が適していたのかもしれませんが、一字、一字、丁寧に書かれています。

興味深いのは、習字の書き方です。

一見しますと、器の縁に沿ってくるりと回るように書いているように見えますが、実際は、内側右端から縦書きで書いて、裏側に続いていたものであることがわかります。

そしてもう一つ、文字の配列におもしろい現象が見受けられます。内面最終行の「ぬるをわか」をご覧ください。「ぬるを」と「わか」の間に、筆の整えが見えるのです。このこ

とは、具体的には、「わか」の文字が細く書かれていることでわかります。

みなさんがご存知のように、「いろは歌」は、七五調四句の今様風の和歌になっています。

「いろはにほへとちりぬるを わかよたれそつねならむ うみのおくやまけふこへて
あさきゆめみしゑひもせず」

(色は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ 有為の奥山今日超へて 浅き夢見し酔もせず)

この歌と墨書の配列を比較してみましょう。

先ほど注目しました筆の整えは、七五調第一句の終わりで行われています。つまり、これを書いた人は、「色は匂えど 散りぬるを」と書いたところで筆を調えたわけです。和歌としての認識があった可能性がうかがえます。でも、そればかりでしょうか？

齋宮から発見されたひらがな墨書をみますと、内面の最終行は、「か」で終わっているようにも見えます。だとすると、どうでしょうか。

わたしたちの中には、「いろはにほへと ちりぬるをわか」と覚えている人がいます。

齋宮から出土したひらがな墨書土器も、これと同じように書いたところで、裏面へと移った可能性があるのです。このことの可能性と意味を考えなくてはなりません。

実は、このような区切り方は、古くからおこなわれていたことがわかっています。

「いろは歌」最古の記録は、『金光明最勝王経音義』（金光明最勝王経という経典の音読解釈本）の冒頭に載せられたものだと言われています。しかも、この本では、七五調で区切らず、七音区切りとなっているのです。

いろはにほへと ちりぬるをわか よたれそつねな・・・・・・といった風にです。

わたしたちは、「いろはにほへと ちりぬるおわか」と覚えた後に、その続きがなかなか覚えられずに、実は、もともとは和歌なんだよと種証をしてもらって、ようやく最後までを暗誦できるようになったのですが、実際は、どちらもはじめからあったと考えることができそうです。齋宮から発見された「いろは歌」を書いた人も、おそらく、そのことを知っていたものと思われれます。だから、「ちりぬるを」で一度筆先を整えながらも、「わか」までで裏面へと移ったのだと思います。

さて、でもです。それなら何故、意味もわかりにくく、覚えにくい「いろはにほへと ちりぬるをわか」が初めからあって、しかも、絶えることがなかったのでしょうか？

真偽のほどはわかりませんが、昔から伝わる興味深い説をご紹介しますおきましょう。

下には、三度、同じものを書出しておきました。但し、中ほどのものではそれぞれ最後の一字を、また、右端のものではそれぞれ五文字目の一字を強調しておきました。

中央のものから、ゴシックを縦に読んでみてください。

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうみのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうみのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

いろはに**ほ**へと
ちりぬる**を**わか
よたれそ**つ**ねな
らむう**み**のおく
やまけ**ふ**こえて
あさき**ゆめ**みし
ゑひもせ**す**

「咎無くして死す。本を津の小女」
＝無罪なのに死罪となって死んでいく。書物を大津に住む小女（妻）へ渡して欲しい。
右端については「付会」（こじつけ）ともとれますが、中央はなるほどと思いませんか？

さて、「いろは歌」はいつごろ成立したのでしょうか？
もちろん、はっきりとしたことはわかっていないようです。しかし、源為憲の『口遊』（970年成立）には、「いろは歌」ではなく別のものが紹介されています。

「たゐにでて なつむわれをぞ きみめすと あさりおひゆく やましろの うちゑへ
る子ら もはほせよ えふねかけぬ」
（田居にでて 菜摘む我をぞ 君召すと 求食り追ひゆく 山城の 打ち酔へる子ら
藻葉干せよ 得舟繫けぬ）

「色は匂えど 散りぬるを」に比べたら、いかにも文字の遊びのような感じですが、『口遊』の時点で「いろは歌」ができていたら、きっと、源為憲も「いろは歌」の方を採用しただろうと思うほどです。研究者の中では、「いろは歌」は『口遊』成立以降とするのが定説のようです。納得できるような気がします。

先に、藤原良相邸宅跡出土のひらがな墨書で、ひらがなは 9 世紀後半には既に確立していたことをご紹介しました。しかし、広く浸透するには、随分と時間がかかったことがわかります。最後に、明治 36 年に万朝報が公募して一等となった「とりなく歌」をご紹介しておきましょう。

「とりなくこゑすゆめさませ みよあけわたるひんかしを そらいろはえておきつへに
ほふねむれぬもやのうち」
（鳥啼く声す夢覚ませ 見よ明け渡る東を 空色栄えて沖つ辺に 帆船群れるぬ霧の中）

【貞観十七年紀年銘土器】

千葉県市原市の稲荷台遺跡 E 地区から発見された素焼きの皿に書かれた墨書史料です。

この器は、第 37 号竪穴建物が廃棄された後に、再び穴を掘りなおして、焼土と一緒に棄てられたものだったようです。

出土状態から、調査者の浅利幸一さんは、護摩法要に関係したのではないかとの意見を発表しています。また、調査報告書で稲荷台遺跡の祭祀遺構について考察を行った國學院大學の笹生衛さんは、①年号の後に「謹（以）」ではじまる文体が『公式令』飛駅式上式「国司謹奏」に類似した公文書などの性格を感じさせること。②記載されている日付が新嘗祭に当日に当たることの理由を挙げた上で、「汚れを忌避する新嘗祭の日に、この墨書土器が使用されたとすると」積奠のような犠牲獣を用いない何らかの祭祀に使われたものと推定しています。ただ、具体的にどんな祭祀が行われていたのかについては、触れていません。

書かれている墨書の文字についても、薄れていて読みにくいこともあって、意見が異なっています。

例えば、皿の内側に書かれている「月」の文字数です。浅利幸一さんは、「内面に不規則に「月」が 10 文字書かれ「月輪」を連想する」と報告していますが、笹生衛さんは「内面には見込み全体に「月」が 9 文字、重ね書きされている」として、違いがあるのです。

外面の墨書については、笹生衛さんが、次のような釈文を挙げています。

「貞観十七年十一月廿四日」（底部に縦書き）

「謹□ □□ □□上□ 水 □□□ □□ 酒□ 名水鳥□ □□」

（紀年銘右から時計回り）

これでは、ほとんど読めていないことになってしまいます。そこでここからは、私見をご紹介します。

まず、墨書の向きについて、考えてみたいと思います。

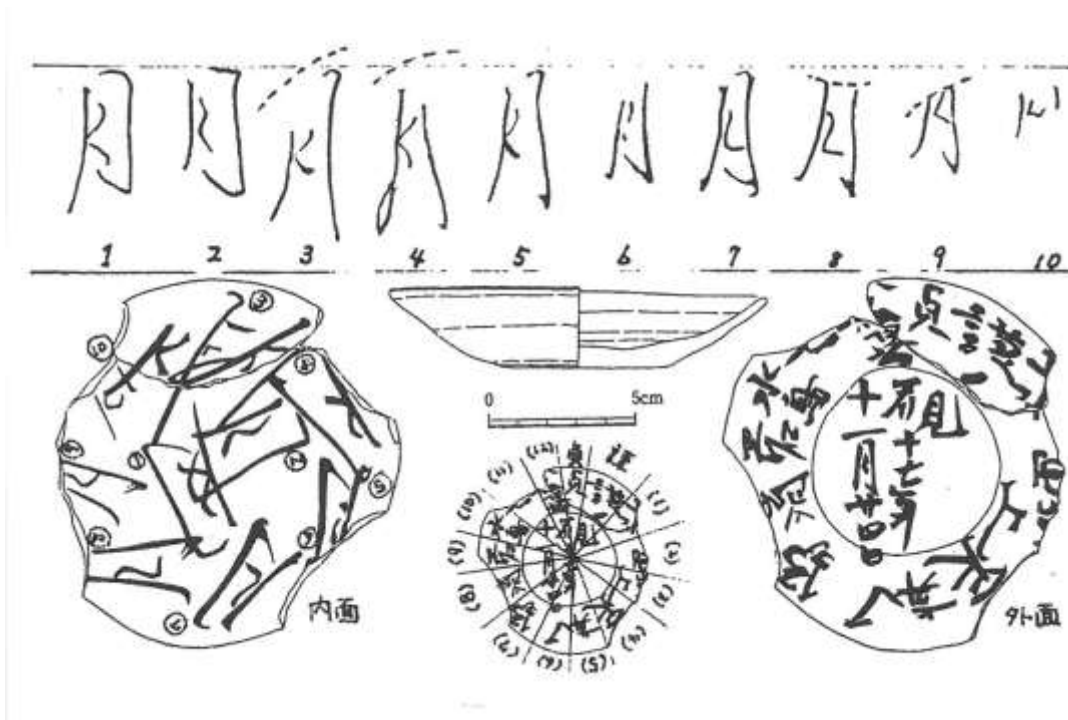
外面に「貞観十七年十一月廿四日」と縦書き二行で書かれていますから、この向きを天地の基準としておきましょう。裏には「月」の文字がたくさん書かれていますので、天地のままそっと裏返してみました。しかし、この向きが正面となる「月」の文字は見あたりません。外面の文字の向きから考えて、器の縁側を天とする意識はあるようですが、表裏で統一的な配置を考慮してはいないことがわかりました。

内面と外面、どちらを先に書いたのか？これでは検討もつきませんでした。ただ、斎宮跡から出土した「いろは歌」の例に倣うなら、内側から書かれたのかもしれませんが。

次に、書き順についてみておきましょう。今までは、「不規則に」とか、「全体に」とか「紀年銘の右から時計回りに」と表現されていましたが、いかがなものでしょうか。

ここで一番初めに疑問に思うのは、何故、時計回りなのかということです。

器の縁を天に見立てたとして、縦書きなら、右から左。つまり、時計とは反対周りに書いていくのが常道というのではないのでしょうか。



文字の配列順を知るために最初に着目したのが、「不規則」とされた内面の「月」の大きさと筆致です。これをわかりやすくするために、器面に書かれた「月」を一つ一つ分解して書き抜いてみました。まっさらな器面には堂々とした「月」から書き始められて、だんだん、前に書いた「月」に影響されて萎縮していきだろうと考えたからです。

その結果、まず初めに中心部分の「月」二文字から書き始めたものと想定することができました。大柄で、ある程度の太さも確保された伸びやかな「月」だからです。図中の①と②です。この二つの前後関係は、一画目の「はらい」の形状から推測することができました。①では、堂々とはらっているのに対して、②は、①に遠慮してちょっと萎縮が見られるからです。この二つの「月」だけでみると、回転はさせていますが、右から左（つまり縦書き）に書き始めていることがわかります。しかし、見込み（内面）の斜面部分になると、回転が変わります。③から⑩にむかって、左手で器の縁を持って、手前に回転させながら空白部分に書いていますので、実際の「月」は時計回りに配置されているのです。見込み底部に①と②を書いた時には、机の上に置いて書いていたのかもしれませんが。回転には、右手も使ったことでしょう。しかし、斜面部分は、机に置いた状態では書くことができません。筆を持ったまま右手でちょっと支えながら、左手で回転させると、時計回りに引きながら書いていくのが書きやすかったのでしょう。⑥から⑨までの「月」に共通する筆先の割れが認められるのは、興味深い現象です。筆跡からみて、一人の人が一気に書いた「月」であることがわかります。

更に注目されるのは、⑥の右肩と③と④の間に、①から⑩までの「月」には無関係な墨痕が認められることです。たぶん、ここにも、かすれて見えなくなってしまった「月」の文字が書かれていたのでしょう。とすると、10文字+2文字=12文字の「月」が、この

器の内面には書かれていたものとする事ができます。これはもちろん、一年を表しています。文字の記載順は、生理学的に見て自然な行動の結果といえます。

だとすると、外面の墨書についても、同様であったと考えることができます。しかし、その場合は、笹生衛さんが指摘したような文章型式のものではなかったと思います。たぶん、内面の「月」と同じように、祭祀に関係する要素（単語）を配置したものと見るのが自然でしょう。類例が下総国分寺から出土した土師器（素焼き）の高台皿の内面に書かれたものであります。「馬・牛・□・酒・判・□・人足馬・荷紵掃・遊女」「井上」です。

これらの場合、祭祀の内容が平安時代に流行する陰陽道に関係しているとするならば、その配置は、起点を北極として、方角を合わせている可能性も考えられるでしょう。

貞観十七年紀年銘墨書土器の場合、外面周囲に配置されている文字は、図の中央下段に区分線を示したとおり、「貞」を含めて十四に区分することができます。しかし、「貞」は年号の一部ですから、内容を示す墨書は、十三通りで構成されていることとなります。

年号の右隣の「謹」の文字は、「つつしむ」とか「とどめる」と訓じて、謹慎などと用いるものです。白川静さんの『字統』という漢字の辞書を開いてみますと、「謹遏（きんあつ）とは、ともに呪霊を閉塞する意をもつ字である。謹遏の意より謹慎の意となるが、慎もまた顛死者の呪霊を顛塞することをいい、その祝禱を謹という。畏み畏みて申すの意である」と書かれています。つまり、紀年銘土器に書かれている内容は、顛死者の呪霊を顛塞するためのものだったと考えることができるのです。そのような祭祀が、貞観十七年十一月廿四日の新嘗祭の日に行われたのでした。

『日本三代実録』巻第廿七に記された貞観十七年の記事によると、この年は例年になく災いの続いた年であったようです。いくつかの例を挙げてみましょう。

まず、天変地異では、地震が二月から八月までに九回報告されています。そのほかにも、日蝕や月蝕が起きました。雷雨が続いたかと思うと、日照りもありました。日暈（にちうん）が見られ、相模国大隅郡では河川が二箇所赤く染まったようです。星と月が、昼間に並んで見えることもありました。

京都では、冷然院が焼失して多くの堂宇を失っています。

二月二日には、従四位上在原善淵が亡くなり、その月の十七日には大納言藤原常行が嵩じています。

六月十三日の記事によると、夜ごとに何万匹というネズミが右京左京にあふれ、北から南に向かって、京の内外に出入りして多くの痕跡を残したとあります。

たくさんの奇奇怪怪な現象に対して、十一月十五日に、陰陽寮は『黄帝九宮経肃吉九篇』に「天を承る道は、人の情に因る」とあるのを引用した上で、「今は中元末、下元の内にあって、三合の運は来年に当たっている。この様な時には、毒気が流行し、早魃が起き、稲が病気になり、火災や盗賊の横行、叛乱や疾病の流行などが続く。これは五行の理運に当たり仕方ないが、祈祷によってその禍福が変わる。従って、天下に詔して、般若心経を讀

ませその災いを逃れるべきだ」と奏上しています。

『日本三代実録』6月13日の記事に、ネズミの話が出てくるのは興味深いところです。ネズミは干支では「子年」と書きます。子沢山から、子孫繁栄の象徴とも言われています。しかし、実際は、「子」の文字とネズミは結びつかないようです。「子」は、「了」（おわり）と「一」（はじめ）を組み合わせた文字で人が大きく手を広げている姿からきているとも言われています。吉野裕子さんの『十二支』という本によると、「子」の方角は真北で、季節は冬だそうです。冬至を含む旧暦の十一月あたりを示しています。この時期は、「陰」から「陽」に移り変わる時期にあたっています。このために、旧暦の十一月に新嘗祭が行われるのだそうです。星座で言うと、天空不動の北極星がこれにあたっています。

とすると、11月15日の陰陽寮の奏上は、「陰」を「陽」へと転換させる祭祀ですから、新嘗祭に合わせて行われるのが最も自然といえるでしょう。

さて、貞観十七年ころになると、既に、京都などからは、「ひらがな墨書」が発見されています。しかし、稲荷台遺跡から発見されている墨書土器に、ひらがなは全く使われていません。これは何を意味しているのでしょうか？

一つ目としては、「貞観十七年」紀年銘墨書土器が、和歌などの宴の席に用いられた土器ではなかったためだと考えることができます。

そして、ふたつ目としては、斎宮跡の「いろは歌」墨書土器からもわかるように、ひらがなの普及そのものが、和歌や女流文学といった貴族層の嗜好によっていたためだと思います。

文字は、律令国家体制下にはじめて一般化した伝達手段です。従って、漢字が主流であるのは仕方ないことなのでしょう。

さて、外面には何が書いてあるのでしょうか？読めない字がたくさんありますが、⑩の「水鳥」は、だれにでも分かります。⑧は「酒」です。⑨は「罌館」だと思われます。

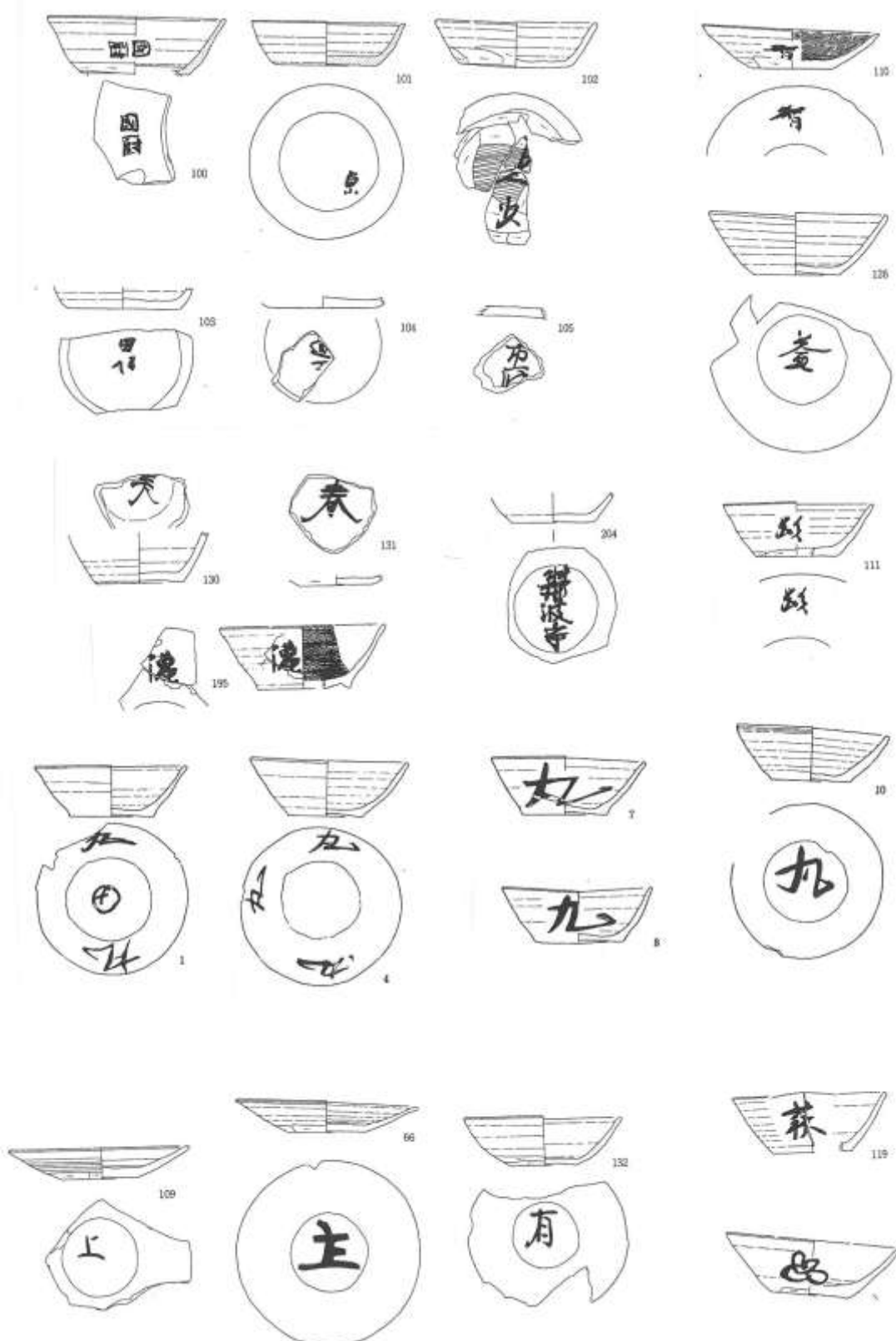
「罌」（こう）は「岡」の異体字です。「こうたて」と読むのでしょうか。

一点の文字史料（墨書土器）でも、様々なことがわかってきます。

問題は、どこまでその史料につき合うかです。

みなさんも、報告書の記述に納得するのではなく、もっと何かわからないかと挑戦してみてください。

【稲荷台遺跡出土の墨書土器】



稲荷台遺跡出土の墨書土器（抜粋）

稲荷台遺跡からは、「貞観十七年紀年銘」墨書土器以外に、200点を越える墨書土器が出土しています。その中から、釈文のはっきりとしているものを書き抜くと、次のようなものが見られました。

遺跡の性格を想像させる史料〔Aグループ〕

京（みやこ）：須恵器杯底部外面 61住居出土

国厨（くにのくりや）：国の饗宴に関わる食事を整える役所。須恵器高台付杯外面

上殿（じょうでん）：身分の高い人の住まい。ロクロ杯底部外面 45住居出土

道士（どうし）：導師のことか。陰陽など。ロクロ杯底部外面

市厨（いちのくりや）：市原郡の饗宴に関わる食事を整える役所。ロクロ杯底部外面

※住居跡出土以外は、グリッド一括資料。

宗教的な性格を想像させる史料〔Bグループ〕

智（とも）、益（えき）、奉（たてまつる）、羽那波寺（はなわでら）9c~10c

最も数が多かった墨書〔Cグループ〕

「丸」（わに）：52点（25%）

稲荷台遺跡から出土している墨書土器を、内容から大きく分けると、A~Dの4グループにわけることができそうです。

Aグループは、遺跡の性格として、国衙的な性格を感じさせるグループです。

「京」は、「京」の異体字で、みやこを指しています。平安京のことではなく、ここでは上総国の「京」を意味しているのでしょう。下総国府跡からは「右京」の墨書土器も出土しています。「京」は、「宮」に対して周辺に広がる都市機能全般を対象としています。それが、平城京や平安京のような碁盤の目のような街区を形成していたかどうかはわかりませんが、ある一定の範囲を、「京城」として認識していたことは確かなようです。

「京城」には、国司の館や市などがあったと思われます。

「国厨」と「市厨」は、共に、役所の饗宴に必要な料理を提供する役所です。「国厨」は国府のための厨、「市厨」は、市原郡のための厨とすることができます。上総国分尼寺跡北側の坊作遺跡からは、「海上厨」の墨書土器が発見されています。更に、上総国分僧寺跡からは、「厨」の墨書土器がたくさん発見されています。

このことからわかることは、国には国の、郡には郡の、寺には寺の「厨」が設けられていたということです。面白いのは、国分僧寺跡から出土する「厨」墨書には、「厨」としか書かれていないことです。「国分厨」とか「僧寺厨」とか「金寺厨」などとは書かれていません。なぜでしょうか？逆に、国府の厨墨書には何故「国厨」と書かれているのでしょうか？また、郡の厨墨書には何故「市厨」「海上厨」と書かれているのでしょうか？

わたし達は、自分の家で着る洋服に、わざわざ名前を書く事はしません。けれども、集団で旅行に行ったり、病院に入院したりするときには、持ち物に名前を書きます。

僧寺の厨院（厨房）は、国分寺の僧侶などに提供する飲食の準備を専らにしていたのでしょう。だとすると、「厨」と書くだけで、寺院の中の他の食器と区別をすることができます。しかし、国府の厨院や郡の厨院は、国庁や郡庁で行われる饗宴にのみ飲食を提供していたわけではありませんでした。また、饗宴の規模によっては、国の厨に加えて、郡の厨も飲食の提供に従事したのでしょうか。だとすると、ただ「厨」と書いてあるだけでは、どちらのものか区別がつかなくなってしまう。そのためにも「国厨」「市厨」「海上厨」と書き分けておく必要があったのです。

「海上厨」が何故上総国分尼寺跡北辺の坊作遺跡から出土したのでしょうか？国分寺の飲食に供する厨は一つですから「厨」でよかったのではないのでしょうか？

これには、少し訳があります。つまり、坊作遺跡の性格の問題なのです。坊作遺跡は、上総国分尼寺跡の北辺に付随して成立した遺跡ですが、性格は、寺院そのものではありません。寺院を造るための「造寺司」が置かれたところなのです。造寺司を所管するのは国府です。そして、実際に、実務を担当したのが海上郡だったのでしょう。そのために、海上郡の厨院を示す「海上厨」の墨書土器が坊作遺跡から発見されているのです。

さて、お話を稲荷台遺跡に戻しましょう。それでは、何故、稲荷台遺跡からは「国厨」と「市厨」の両方の墨書土器が発見されているのでしょうか。答えは簡単です。両方の厨が出入りするような施設が稲荷台遺跡の性格だったからです。「上殿」や「道士」、貞観十七年紀年銘土器などを総合して考えてみてください。稲荷台遺跡がどのような遺跡だったのかを知ることができるはずです。みなさんはどのように思われますか？

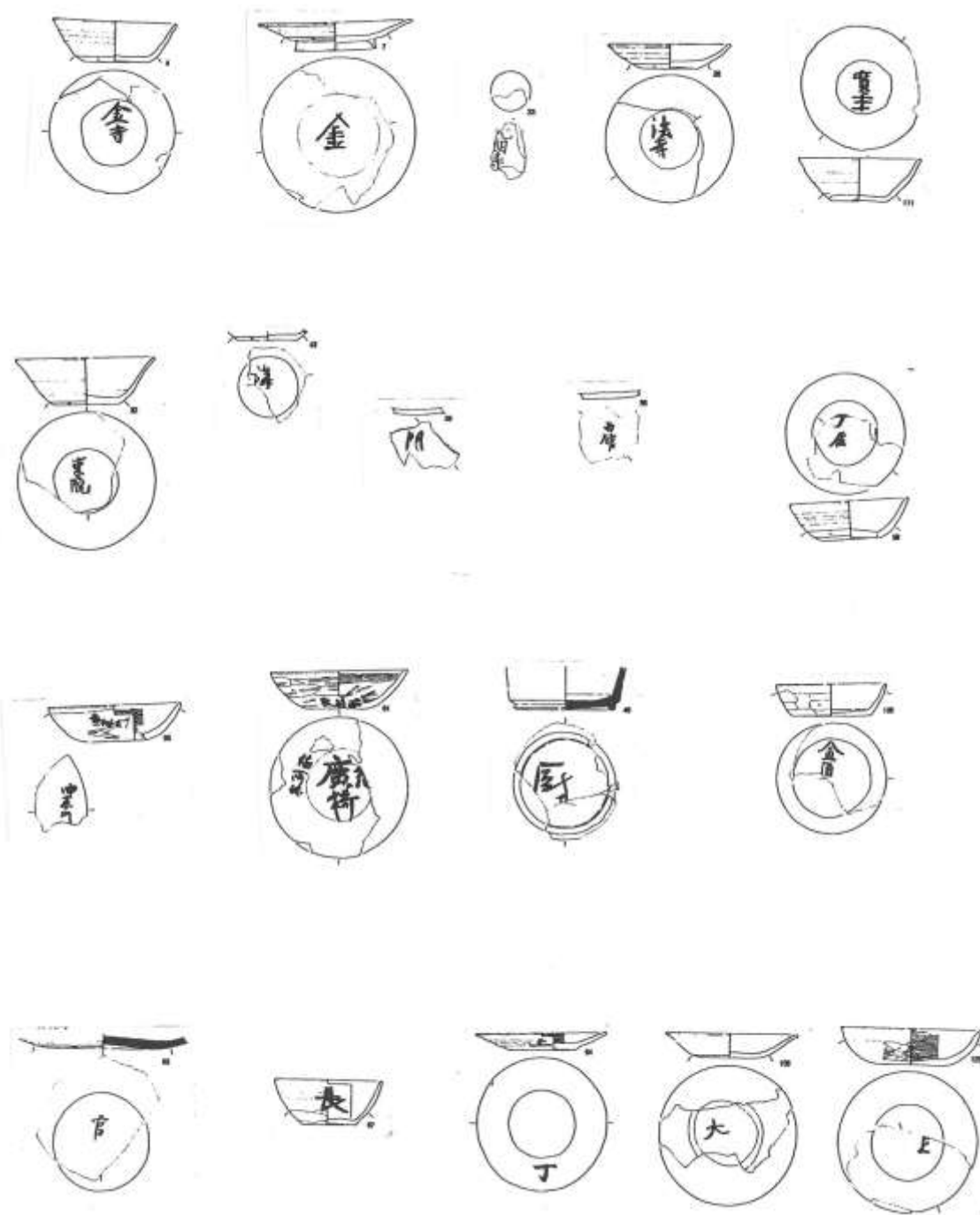
結論を出してしまう前に、Bグループ以降の墨書どきについても見ておく必要があります。

Bグループは、宗教的色彩が感じられる墨書土器を集めてみました。Aグループよりも量や種類は少ないですが、「羽那波寺」（埜寺）はまさしく仏教寺院の名称ですし、「奉」は神さまや身分の高い方の奏上する時の定句です。何か、捧げものをしてお願いをしたのでしょうか。それに、「道士」が関わっています。貞観十七年紀年銘土器と共に、祭祀的は儀式を行う場所であったことがわかります。

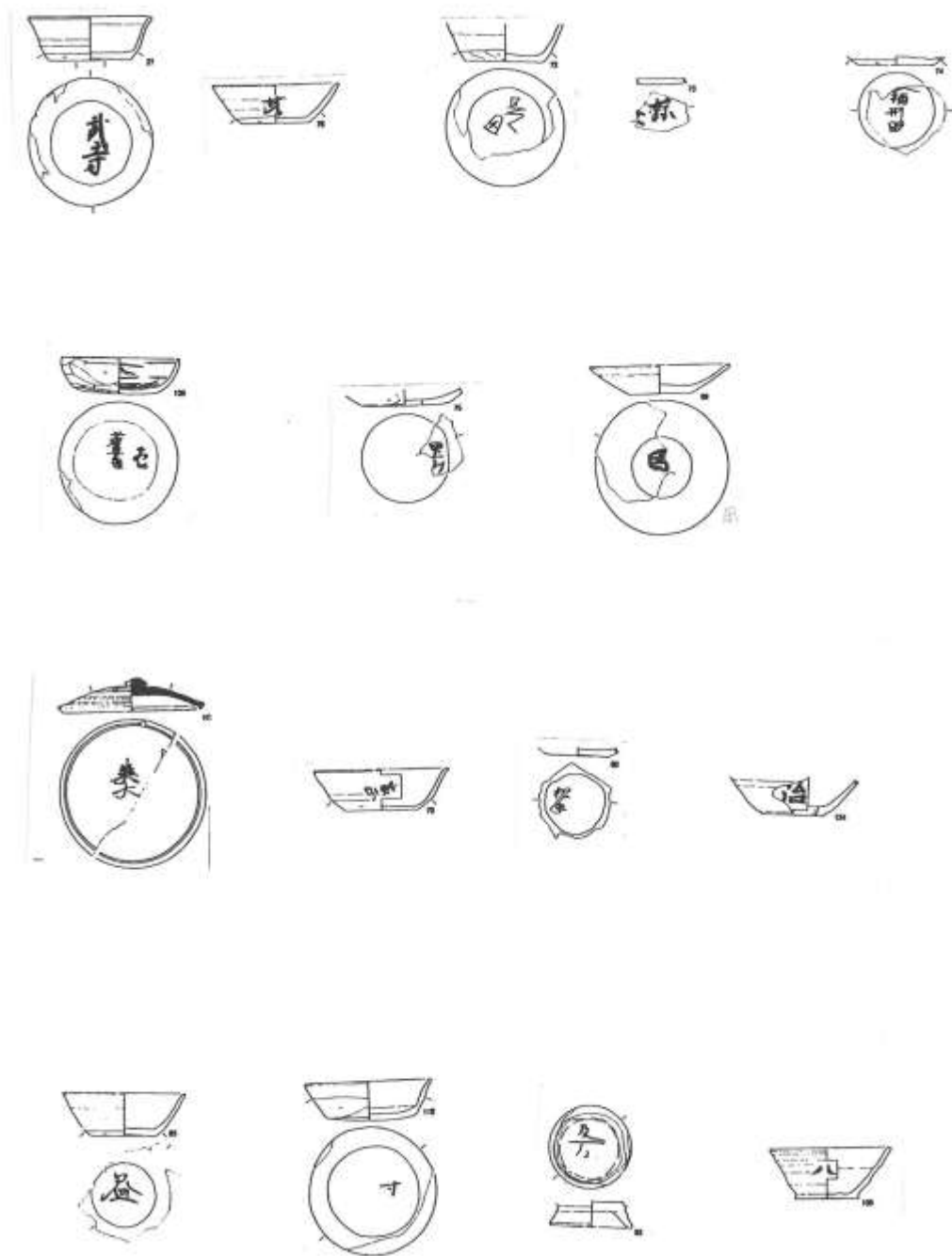
実は、稲荷台遺跡の祭祀遺構の中には、獣骨を伴うものも発見されています。これは、道教に基づく釈てんの挙行を示唆しています。

最後に、最もたくさん発見された「丸」の墨書に触れておきたいと思います。まず書かれている場所をみますと、器の横に2カ所かかっているもの、3カ所書かれているもの、底に書かれているものの三種類があります。書かれている土器は、市原ではよく見かけるタイプのもので、中には、「丸」かもしれないものもあります。祭祀的というよりは、区別のための名前みたいな感じです。「国厨」や「京」などに比べると、真ん中に堂々と書かれています。誰もが、自分たちのものだと分かるように書かれているみたいです。名まででしょうか。苗字だとしたら「丸」さんは、「わに」と呼ぶのでしょうか。

【上総国分僧寺の墨書を読み解く】



上総国分寺跡出土墨書土器抜粋（1）



上総国分寺跡出土墨書土器抜粋（2）

【墨書土器備忘】

① いつ書かれた墨書土器なのか

- ・生産地で出荷前に書かれたもの
- ・集積地で整理のために書かれたもの
- ・消費地で区別のために書かれたもの
- ・消費地で儀式のために書かれたもの
- ・消費地で廃棄以降に書かれたもの
- ・その他

② 何を書いたのか

- ・施設の名前を書いたもの
- ・地名を書いたもの
- ・人名を書いたもの
- ・祈祷文など祭祀の文言を書いたもの
- ・饗宴の中で書いたもの
- ・文字の練習を行ったもの
- ・その他（含 絵画）

③ 何に書かれているのか

- ・食器に書かれている場合
- ・貯蔵器に書かれている場合
- ・その他

標記	分類	僧寺 北辺部	僧寺 東辺部	僧寺 東南部	僧寺 南辺部	僧寺 西辺部	荒久 遺跡	稲荷台 遺跡
朝 尊	人 名	1						
充廣崎 備杯	人 名	1						
英大	人 名	1						
會郎	人 名	1						
金安	人 名	1						

松王	人名	1						
鶴金	人名			1				
畔口院	組織						1	
家正	組織	1						
市厨	組織							1
口院	組織						3	
大屋	組織						1	
官	組織	1						
京	組織							1
金酒	組織	1						
国厨	組織							1
厨	組織	7	1	1	53	2		
厨上	組織						1	
講	組織	1	1	2				
講院	組織	3		1		2	2	
酒	組織				1			
四院	組織						3	
上殿	組織							1

新田	組織	1			1			
政	組織							1
西方	組織					1		
荘	組織	1						
菌	組織						1	
田	組織	1				1		1
寶	組織			3				
田田	組織			1				
中院	組織						1	
丁	組織	1						
長	組織	1						
長口	組織	1						
庁屋	組織	2						
寺司	組織						1	
田伯	組織							1
東院	組織	5						
道士	組織							1
内院	組織	1						

西	組織	1						
西館	組織	1						
東	組織	6	1					
房	組織	1						
門	組織	1						
(弓)石取	組織	1						
□院	組織	1		1				
畔	地名	2					3	
天羽	地名						1	
夷瀧郡	地名					1		
老 蘆道	地名	1		1				
湿津寺田	地名						1	
大野	地名	1						
小川	地名						2	
罌	地名	1		1				
甲	地名		1					
罌山	地名	1						
周	地名	1						

柄刑田	地名	1						
長谷部郷西□ 里	地名						1	
埴生郡	地名						1	
蒜	地名	1						
武	地名	2						
山邊□	地名						1	
□山口	地名	1						
金	寺名	14					1	
金寺	寺名	4						
金明光	寺名					1		
光明寺	寺名	1						
金光	寺名						1	
寺	寺名	3		1				
寺	寺名						3	
寺□	寺名	1						
羽那波寺	寺名							1
光	寺名	1						
武寺	寺名	1						

法	寺名	1						
寶口	寺名	1						
法寺	寺名	1						
寶寺	寺名	1						
管笙	道具	1						

【寺名を表した墨書】

わたしたちは、史跡上総国分僧寺跡と呼んでいます。けれども、上総国分寺と書かれた墨書土器は、一点も発見されていません。「金寺」「金光明寺」などと呼ばれていたようです。これは、「金光明最勝王経」を奉じる寺院だったからです。そのほかに、「法寺」「寶寺」といった墨書土器が発見されています。

「光明寺」の墨書は、頭の部分の「金」が欠けてしまったからでしょう。でも「金明寺」はどうでしょうか？「光」を書き忘れたのか、それとも、そのように呼ばれていたのか？

僧寺跡から「武寺」と書かれた墨書土器が発見されていますが、これはたぶん「武射寺」の略記だと思われます。「武射」は上総国内の郡の一つ、現在の成東近辺です。真行寺廃寺跡から「武射寺」と書かれた墨書土器が発見されています。武射郡の郡役所（郡衙）は真行寺廃寺西側の嶋戸東遺跡です。国分寺の地名墨書の中にも「武」が発見されていますから、武射郡が国分寺と関わりをもっていたことがわかります。

上総国分尼寺跡からは、「法花寺」や「法華寺」などの墨書土器が発見されています。これは、尼寺が「法華経」を奉じた法華滅罪之寺として建立されたからです。こちらでも、「上総国分尼寺」などの墨書土器は発見されていません。

寺院名の墨書では、稲荷台遺跡に「羽那波寺」が発見されているのが注目されます。「ハナワテラ」と読むのでしょうか。「武射寺」の事例から「ハナワ」という地名を探してみましたが、郡名にも郷名にも見つかりませんでした。「ハナワ」は高い所の先端の地形を指した言葉のようです。「塙」という文字も使われています。「稲荷台遺跡」の近く（千草山など）にはハナワと呼ぶにふさわしい地形があります。もしかしたら、地形からついた呼び名かもしれません。国分寺のような大伽藍の寺院ではなく、何かの施設に付随した仏教施設であったのかもしれない。

さて、先には武射郡とのかかわりについて触れましたが、それ以外には、どのような地域の墨書土器が発見されているのでしょうか？

【施設などを表した墨書】

- ◎ 施設名を表す 院（四院、講院、東院、政所院、厨院など）、所（油採所、備所など）
- ◎ 建物を表す 殿（上殿）、館（西館、国司館など）、屋（大屋、庁屋など）、門

【官の組織などを現した墨書】

「官」、「長」、「丁」（よぼろ）、「大目」（台遺跡出土）

【地名を表した墨書】

- 「畔」＋「蒜」＝「畔蒜郡」⇒小櫃川の上流域。
- 「天羽」＝「天羽郡」⇒現在の富津市あたり。
- 「夷瀧郡」（夷隅郡）⇒現在の夷隅地方（御宿から大多喜）。
- 「周」＝「周淮郡」⇒現在の小糸川流域。君津市から木更津市にかけて。
- 「埴生郡」（はぶぐん）⇒睦沢町近辺
- 「山邊□」＝「山邊郡」⇒現在の東金近辺
- 「□山口」＝「山邊郡山口」⇒現在の東金西端あたり。「山口館」墨書。
- 「湿津」＝「市原郡湿津郷」⇒現在の市原市潤井戸近辺
- 「柄刑」＝「長柄郡刑部郷」⇒現在の長柄町近辺。刑部は市原市刑部か。
- 「長谷部郷」⇒市原郡か海上郡の長谷部郷か。
- 「海上厨」（尼寺跡出土）⇒市原市西野周辺

※たくさんの方が集まると、持ち物に名前が必要になってくる。

※性格のはっきりとした同時代の遺跡から発見される墨書土器を比較することで、墨書土器の意味もだんだんとわかるようになってくる。